

栽培漁業技術開発事業（要約）

（ハマフエフキ 八重山海域）

與那嶺盛次、多和田真周、大城信弘、友利昭之助

本研究の詳細は昭和59年度栽培漁業技術開発事業調査報告書（沖水試資料No.83）において報告したので、ここでは概要のみを記す。

1. 種苗生産

マガキ幼生、カキ sp 幼生、選別ワムシ、S型ワムシをそれぞれ組合せ、初期飼育中における初期餌料について飼育試験を実施した。各試験区とも大量減耗は、日令4～8に生じ、全試験区の半数にあたる12試験区では飼育を中止し、飼育を継続した試験区でも1.6%以下の低い歩留りであった。餌料種類別飼育試験を実施した中ではマガキ幼生+選別ワムシ区が若干良い結果を示したため、マガキ幼生を主体とした給餌飼育方法を検討する必要がある。

2. 中間育成

(1) 当支場で種苗生産した全長18.7～25.0mmの種苗11,652尾を用いて、昭和59年6月4日から11月14日まで海面小割網生簀4面で中間育成を実施した。その結果、尾叉長98.0～113.4mmの大型種苗5,180尾、57.0mmの小型種苗1,177尾を取り上げた。中間育成の歩留りは48.1～73.5%であった。

(2) 沖出し後完全に餌付くまでのアルテミア投餌効果について比較試験を実施したが、魚体が大きかったため、顕著な差はでなかった。

3. 放流と追跡

(1) 昭和59年度は川平湾に平均尾叉長104.7mmと113.4mmの大型種苗2,295尾、名蔵湾に平均尾叉長98.0mmの大型種苗2,584尾と57.0mmの小型種苗1,077尾を放流した。総計5,956尾であった。

(2) 放流魚は全数標識を行った。大型種苗4,879尾のうち、アンカータグ（15mm）装置魚は4,630尾、左腹鰭除去は249尾であった。小型種苗1,077尾は右腹鰭除去を実施した。

(3) 放流後の標識魚の行動は海面放流後一直線に海底に向かい、海底近くで群を作って放流地点周辺を群泳した。小型種苗がアカカマス、マダラエソ、アオヤガラに捕食されるのを観察した。川平湾ではゴマフエダイによる捕食を観察した。

(4) 川平湾での再捕尾数は放流後50日目まで28尾（再捕率1.2%）で、移動距離は1.5km以内と小さかった。名蔵湾での再捕尾数は放流後59日目まで7尾（再捕率0.2%）で少なく、移動距離は2.5km以内で小さかった。再捕魚はアンカータグ標識魚であった。

(5) 標識魚の成長は名蔵湾では順調であるが、川平湾では成長が明確でない。

(6) 大型魚（100mmサイズ）と小型魚（50mmサイズ）を用いて標識飼育試験を実施した。15mmアンカータグはハマフエフキの標識としては脱落が多く、生残率が低いなどの問題点があった。

腹鰭抜去は大型魚、小型魚とも再生率が低く、生残率が高いことから実用の可能性があった。

4. 漁業実態

(1) 八重山地区では一本釣、刺網等でフェフキダイ類は漁獲されており、農林統計では“その他のたい類”に含まれている。フェフキダイ類の占める割合は15%である。

(2) 八重山地区のフェフキダイ類漁獲量は58年に112トンであり、うちハマフェフキは36トンで33%を占めている。